

深い学びを追究する教育課程と教育方法の研究

A Study on the Future of Curriculums to learn deeply and Educational Methods

五百住 満

Mitsuru IOZUMI

(関西学院大学教育学部教授)

はじめに

近年、国内外では社会の急激な変化によって新たな教育課題が生まれ、予測するのが難しい社会で生き抜く「人材」を育成するため、基礎学力や専門的な知識・技能だけではなく、汎用的な資質・能力を強く意識し、より汎用的な認知・社会スキルのレベルアップを求めている。また、社会的な関係の中で学び、考え、社会に役立つ解を提案できる力を求めている¹。

特に 1990 年代以降、欧米を中心に諸外国で、コンピテンシー (competency) をもとに教育の目標を設定して、教育政策をデザインする動きが広がってきており、そのため、OECD では「人間関係の形成や社会の発展にかかわる力 (キー・コンピテンシー)」を測定調査するために PISA を取り入れ、カリキュラムを開発するよう提案している。こうしたカリキュラム開発は世界的な教育の潮流である。

文部科学省では、これら諸課題に対応していくために、新学習指導要領を平成 29 年 3 月 31 日に告示し²、学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、子どもたちが未来の担い手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の理念が掲げた教育課程を基軸に据えて学校教育全体の改革を進めようと意図している。

これまでの学習指導要領では「何を目標に、何を教えるか」については教科ごとに検討を行い、その結果がそのまま各教科等の目標・内容とされてきた。しかし、新学習指導要領では、まず目標として「育成すべき資質・能力」を明確に掲げ、「何を知っているか (contents)」から「何ができるようになったか (competency)」へ転換し、「何を教えるか」から「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視する方向へと教育課程編成の基本原理の「構造改革」³を行っているのである。そのために、各教科等の目標、内容、方法、評価を横断的に横糸で繋ぐかたちで設定する構造となっている。すなわち、カリキュラムの類型⁴で言えば相関カリキュラムにより近いと言える。

ところで、教育課程の編成に関する規定は、大きく学校教育法施行規則と学習指導要領、ならびに地方教育行政の組織及び運営に関する法律で定められており、これら法律等を踏まえて、教育課程は各学校で編成することが基本とされている。

1 国立教育政策研究所「教育課程編成に関する基礎的研究報告書 5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」p. 14-15

2 文部科学省 小学校学習指導要領(平成 29 年 3 月 31 日告示)

3 前川喜平文部科学省初等中等教育局長「これからの教育改革はどうか」『教職研修』2014 年 4 月号教育開発研究所

4 林尚示「カリキュラムの類型」、天野正輝 (編著) (1999)、『教育課程重要用語 300 の基礎知識』明示図書 22 頁

このことから、各学校においては、今日の教育を取り巻く状況等を踏まえ、子どもが身に付けていくべき資質・能力を明確化するとともに、教育課程を適切に編成し、子どもたちの主体的・対話的で深い学びを保障する。そして、横断的に、相關的に、各教科等の目標、内容、方法、評価が設定し、子どもたちの学びの質を高めるためのカリキュラム・マネジメントを確立して、学校教育の改善・充実の好循環を生み出していく必要がある。

そこで、本研究では、子どもたちが未来の担い手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の理念が掲げた深い学びを追究する教育課程編成の在り方を検討するとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの深い学びを追究する教育方法の在り方について実践事例等を通して論述することとする。

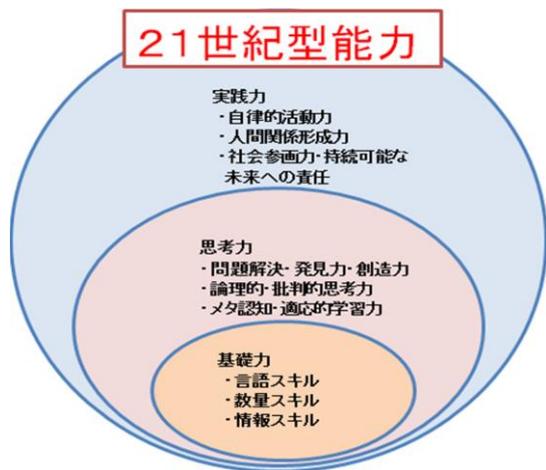
キーワード：知識基盤社会、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び

1 新学習指導要領のポイントは(教育課程編成の基本原則)

(1) 新学習指導要領で育成すべき「21世紀型能力」について

国立教育政策研究所では、最近の諸外国の教育の動向や国内の研究開発校での先進的事例等を参考に整理して、「21世紀型能力」⁵を提案している。

今後、「育成すべき資質・能力」である「21世紀型能力」とは、学力の三要素である ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得、② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・



表現力等、③ 学習意欲を、「課題を解決するため」の資質・能力という視点で再構成し、これからの学校教育で身に付けさせたい資質・能力として示したものである。

変化が激しく、未来を予測するのが難しい現代社会では、何よりも「未知の問題」に答えを生み出す「力」が求められる。そういう意味で、問題解決・発見力・創造力からなる「思考力」を中核として、言語スキル・数量スキル・情報スキルからなる「基礎力」が支え、中核となる「思考力」の使い方を「実践力」が方向づけるという三層構造となっているのである。

図1 「報告書5」26頁より

(2) 「21世紀型能力」を育むカリキュラム・マネジメント

新学習指導要領では、「育成すべき資質・能力(21世紀型能力)」を横断的に、相關的に、各教科等の目標、内容、方法、評価が設定される必要があるとしている。そこで、学年、教科・科目、領域、さらには教科・科目の中の単元をこえて、適切なカリキュラムとして構成することが新たな課題となる。「教師は、単元全体を通して、どのような学習展開が子どもに適合した効果的な学習活動になるかという、カリキュラム・マネジメントの力を発揮することが求められる」⁶のである。

⁵ 前掲報告書 5p. 7

⁶ 高階玲治「次期教育課程とアクティブ・ラーニング」『月刊プリンシパル』2015.5月号 p. 23

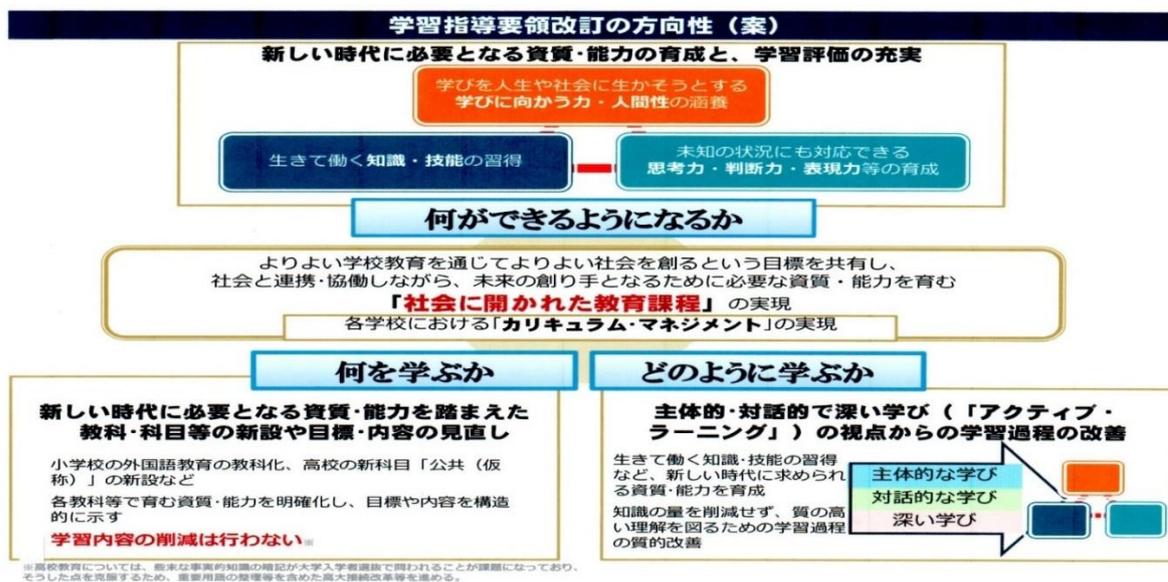
カリキュラム・マネジメントとは、田村知子は「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成していく営みである」⁷とし、そのためのより効果的かつ効率的な教育活動を実現する考え方と手法を提案している。

カリキュラム・マネジメントの基軸は、カリキュラムの内容・方法、機能上の「関連性(Relevancy)」と条件整備活動(マネジメント)上の「協働性(Collaboration)」にある⁸。「関連性」とはカリキュラムの内容等の関連やつながりのことで、具体的には、学年を超え、教科と領域を繋いで、目標・内容・方法・スキル上の関連やつながりを明らかにして、意図的に「関連性」を意識して実践することで、限られた中での学習効果、学習効率をあげることが必要である。田村は、「関連性は、実践の効果・効率を上げるだけではなく、子ども自身が、各教科等で学んだ「知」を内面で総合化するためにも必要であるから、学校で必ず取り組むべきもの」⁹とも言っている。

カリキュラム・マネジメントを効果的に行うには、教師間でカリキュラムと学習・指導方法を共有化していくことが必要であり、実践に関係する教師が学習・指導方法が豊かであることが必要である。そういう意味で、各学校においてカリキュラム・マネジメントや学習・指導方法、評価方法の改善を検討していくことがとても大切なことである。

(3) 「21世紀型能力」と「主体的・対話的で深い学び」について

新学習指導要領の方向性は、以下の図2の通りである。新しい時代に必要となる資質・能力とそれを育む社会に「開かれた教育課程」の在り方と方向性をまとめている。



特にこの図2に表された「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)は、「21世紀型能力」として整理・提案された「育成すべき資質・能力」を確実に育むための具体的な学習・指導方法で

⁷ 田村知子 『カリキュラム・マネジメント-学力向上へのアクションプラン-』 日本標準 2014 p. 12

⁸ 中留武昭・曾我悦子 『カリキュラムマネジメントの新たな挑戦』 教育開発研究所 2015 p. 18

⁹ 田村前掲書 p. 29

あると整理している¹⁰。

これは、教育課程編成の基本原理が、「何を教えるか」から「どのように学ぶか」という課題の発見と解決に向けて主体的協働的に学ぶ学習(アクティブ・ラーニングの視点)により「学びの質や深まり」を重視する方向への転換でもあると言える。

ところで、「アクティブ・ラーニング」はもともと大学等高等教育の用語であり、「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」として、中央教育審議会が平成 20 年 12 月に出した「学士力」答申の「用語解説」にその具体的内容が出てくる。その内容は以下の通りである。

「アクティブ・ラーニング」とは、

伝統的な教員による一方的な講義形式と異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた授業・学習法の総称。学習者が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる教授法。発見学習、問題解決学習、経験学習、調査学習などが含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワークなどをおこなうことでも取り入れられる¹¹。

高階玲治(2015)によると、『アクティブ・ラーニング』は、『学習の定着性』からも注目されている学習・指導方法でもあり、さらに、アメリカ国立訓練研究所(National Training Laboratories)の『ラーニング・ピラミッド(Learning Pyramid)』は、講義(Lecture)は 5%、資料や書籍の読書(Reading)は 10%、視聴覚(Audio-visual)は 20%、実演(Demonstration)が 30%、グループ討議(Discussion Group)が 50%、自らの体験(Practice Doing)が 75%、他人に説明する(Teaching Others)は 90%と、能動的で主体性が必要な学習・指導方法になるほど学んだ内容の定着率が高い¹²としている。

これらのことを踏まえたうえで、新学習指導要領では、子どもたちが学ぶことに興味や関心を持ち、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げ深めたり、また、そのことによって身に付けた資質・能力が様々な課題の対応に生かせることが実感できる「深い学び」が重要であることから「主体的・対話的で深い学び」を提起しているのである。このためには、学びの質を高めるための授業改善への取り組みは不可欠であると言える。

2 では、なぜ「深い学び」が必要なのか、また、そのための教育方法を考える

「アクティブ・ラーニング」は、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた授業・学習法の総称であり、教室内でグループ・ディスカッション、ディベート、グループワークなどを行うことでも取り入れられてきた。しかし、「アクティブで授業は盛り上がったが、子どもたちが果たして深いところまで内容を理解して盛り上がっていたのか、また、活動的に見えて実は深く考えていなかったの

¹⁰ 斎藤剛史「教育誌 5 月号アクティブ・ラーニングと次期改訂」『内外教育』2015 年 5 月 19 日号

¹¹ 「学士課程教育の構築について(学士力)」答申「用語解説」55 頁

¹² 高階玲治「次期教育課程とアクティブ・ラーニング」『月刊プリンシパル』2015. 5 月号 p. 22

はという、「活動あって学びなし」の授業が繰り返されてなかったか点検する必要がある。

つまり、習得・活用・探究という学びの過程では、子どもたちが「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けたり、情報を精査したり、問題を見出して解決策を考えたり、創造したりしていくためには「より深い理解」と「より深い学習」、「より深い関与」が必要であることから、学びの深さを追究する学習である「ディープ・アクティブラーニング」が重要なのである。

松下佳代(2015)¹³は、学びの「深さ」を追究する学習論の系譜として、①深い学習(deep learning) ②深い理解(deep understanding) ③深い関与(deep engagement)をあげている。

深い学習となるには、学習への深いアプローチを必要としている。深いアプローチは、概念を既有的知識や経験に関連付けたり、共通するパターンや根底にある原理を探したり、証拠をチェックし、結論と関係付けたり等しながら意味を追求することとしている。

深い理解には、知には深さの軸があり、永続的な理解である本質的な問いや核となる課題を含むものとしている。深い関与とは、課題に没頭して取り組んでいる心理状態にあることとしている。

さらに松下は、深い学びに誘う学習サイクルを以下のようにまとめている。

・コンフリクト：コンフリクト（ズレ、葛藤、対立）で学習を動機づけを図る

↓

・内化：コンフリクトの解決を図る知識やスキルをいったん習得する

↓↑

・外化：習得した知識やスキルを活用して問題解決を行う

↓

・リフレクション：学びを振り返り、知識やスキルのよさを感じる

3 「主体的・対話的で深い学び」の授業実践事例から深い学びを追究する「教育方法」の在り方を考える

「道徳教育に関わるいのちの教育を軸にしたカリキュラムマネジメント」の共同研究者である明石市立鳥羽小学校 大西郁子教諭の第1学年における実践例から考えてみることにする。

(1) 第1学年3組道徳教育学習指導案と授業の考察

指導者 明石市立鳥羽小学校教諭 大西 郁子

子

資料：「うまれてきてくれて、ありがとう」

1. 主題名 命の誕生
2. 内容項目 3-1 生命尊重
3. ねらい

長い月日をかけて育ち、家族の一員となった弟の誕生を喜ぶわたしを通して、人が生まれること素晴らしさを感じ、命の大切にしようとする気持ちを育てる。(実感として捉える)

4. 展開

¹³ 松下佳代(2015)「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」京都大学高等教育研究開発推進センター編『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』勁草書房 1-27

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 資料の範読を聞く。 これから兄弟ができることを楽しみにしている主人公の気持ちを考える。(ペア学習等) 	<p>七月、ごはんを食べながら、おかあさんのお腹を触ったわたしはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> お姉ちゃんになるの楽しみだな。 早く生まれてきてほしいな。 おかあさん、しんどそうだけど大丈夫かな。 お母さんのお腹に耳を当てて、赤ちゃんが動くのを感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料を範読する。 おかあさんのお腹を触りながら、お姉ちゃんになることを楽しみにしている主人公の気持ちに共感させる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> お腹の中で成長している赤ちゃんを感じながら、赤ちゃんに話しかける主人公の気持ちを考える。(動作化等) 赤ちゃんが生まれ、姉になった主人公が手紙を渡すときの気持ちを考える。 	<p>十月、(お母さんのお腹に耳を当てている挿絵を見て) 何をしているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 耳を当てて、お話している。 「みんな、待っているよ。」で、声をかけている。 元気に生まれてきてくれて、うれしいよ。 今日から私はお姉ちゃんだよ。これからよろしくね。 	<ul style="list-style-type: none"> お腹の中にいる赤ちゃんに話しかける様子から、赤ちゃんが生まれることを楽しみにしている気持ちが強くなっていることをおさえる。 弟が生まれたことを喜ぶ主人公の様子や、生まれてきたときの母の喜ぶ様子から、命の誕生の尊さを実感できるようにする。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 新しい命が生まれることについて考えてきた今の自分の気持ちを振り返って書く。 	<p>二月になり弟が生まれたときに、わたしが「うまれてきてくれて、ありがとう」と書いた手紙をどんな気持ちでプレゼントしたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> かわいいな。仲良く遊ぼうね。 みんな待っていたよ。会えてうれしいよ。 赤ちゃんが生まれるとみんな嬉しい気持ちになることがわかりました。 今日勉強してみても、優しい気持ちになりました。 	<ul style="list-style-type: none"> また、家族に支えられて誕生してくることを実感させる。

○指導者による授業の考察と指導にあたっての留意事項

・授業前の取り組み

「いのち」に係る事前アンケートを行った。1年生にとって、このアンケートは内容・分量・方法等、難しいものを感じた。そこで、一問ずつ読み上げ、子どもたちに解説を加えながらアンケートを実施した。アンケート後、普段から取り組んでいる一日を振り返って書く「一言日記」に、自分の存在を否定する内容を書く子どもAが現れた。1年生にとって「生」や「死」が、自明のものではないことが分かった。そこで、1年生相応に自分の存在を認める活動(自分のいいところ見つけ)、友だちから自分のよさを認めてもらう活動(友だちのいいところ見つけ)を行った。友だちの普段の様子や頑張っていることに目を向け、一人ひとりが大切な存在であることを伝えてきた。また、絵本の読み聞かせ(例えば、『おへそのあな』『おまえうまそうだな』など)を取り入れ、自分という存在は多くの人に

囲まれ、支えられ、愛されて生きていることに触れてきた。並行して、年度当初から友だちの頑張りやいいところを見つける取り組みや教室でのアカハライモリの飼育を行っている。

・授業での取り組み

資料「うまれてきてくれて、ありがとう」の時間経過にそって学習を進めた。物心ついたころに兄弟が生まれた経験を持つ子どもたちは少ない。そこで、全ての挿絵を拡大して提示した。七月、お母さんのお腹に赤ちゃんがいることを知り、「わたし」が姉になることや家族が増える喜びに触れさせた。十月、胎動を感じるようになった母のお腹に話しかける動作を取り入れて「わたし」の心情に寄り添わせた。動作化することで、実感を伴っていのちについて考えさせるためである。小さな声で優しく語り掛ける子どもの様子が見られた。また、小さな声で語り掛ける友だちの言葉に、必死に身を乗り出して聞き取ろうとする子どもの様子も見られた(図3)。二月になり、弟が誕生する。母が赤ちゃんにかけた「うまれてきてくれて、ありがとう」の言葉は、この資料のタイトルと同じ言葉である。また、「わたし」が弟に渡した手紙に記した言葉も「うまれてきてくれて、ありがとう」である。この「わたし」が書いた手紙をどんな気持ちでプレゼントしたのかを考えさせた。弟の誕生を喜んだり、弟との未来の出来事を期待したりする意見が出された。ここで、手紙を読めない弟になぜ手紙を渡したのかについても問うた。子どもたちは、弟が手紙を読めなくても読んであげるとよい、誕生を喜ぶ嬉しい「わたし」の気持ちは弟に伝わると考えたから、手紙を渡したと考えて発言していた。



図3 お母さんのお腹に話しかける

○授業後の子どもの変容

授業の後半で、この授業で考えたことを記述させた。多くの子どもたちが赤ちゃんが生まれることを学習し優しい気持ちになったこと、生まれた弟と色々なことをして遊びたい気持ちになったことなどを書いていた。事前アンケートで自己の存在を否定していた子どもAは、命の大切さを学んだことを記述した(図4)。また、子どもBの記述から、自分が生まれたときの家族の気持ちに思いを巡らせている様子が見られた(図5)。さらに、子どもCからは、「(この学習を通して)ポカポカの気持ちになった」と話す様子が見られた。

後日、国語科物語文「ずっと、ずっと、大すきだよ」の学習を行っ

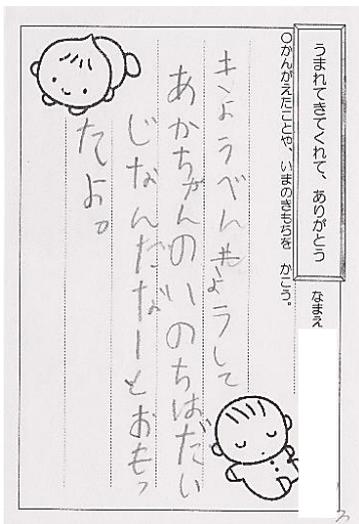


図4 子どもAの記述

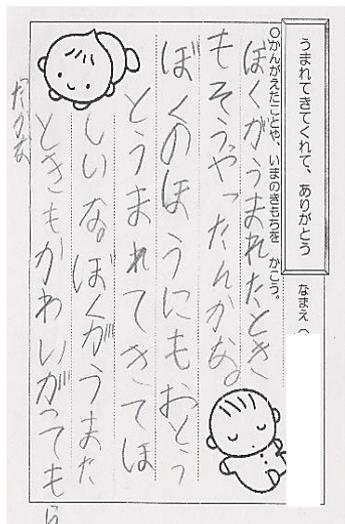


図5 子どもBの記述

た。学習後、生き物は誰かに愛されて生きていることに触れて、学習の振り返りを書く子どもDがいた。また、自分のことを叱る大人がいるのは、自分のことを心配してくれているからだ日々の日記に記すようにもなった。

1年生にとって、「生」や「死」の理解は難しい。1時間の道德の授業を通して、子どもたちはいのちの誕生をテーマに学習した。しかし、子どもたちはこの道德の1時間だけでなく、日々の生活のさまざまな場面で「いのち」の大切さに触れている。その中で、自己の大切さ、周囲に支えられて生きていることを実感しながら成長していくことが分かった。

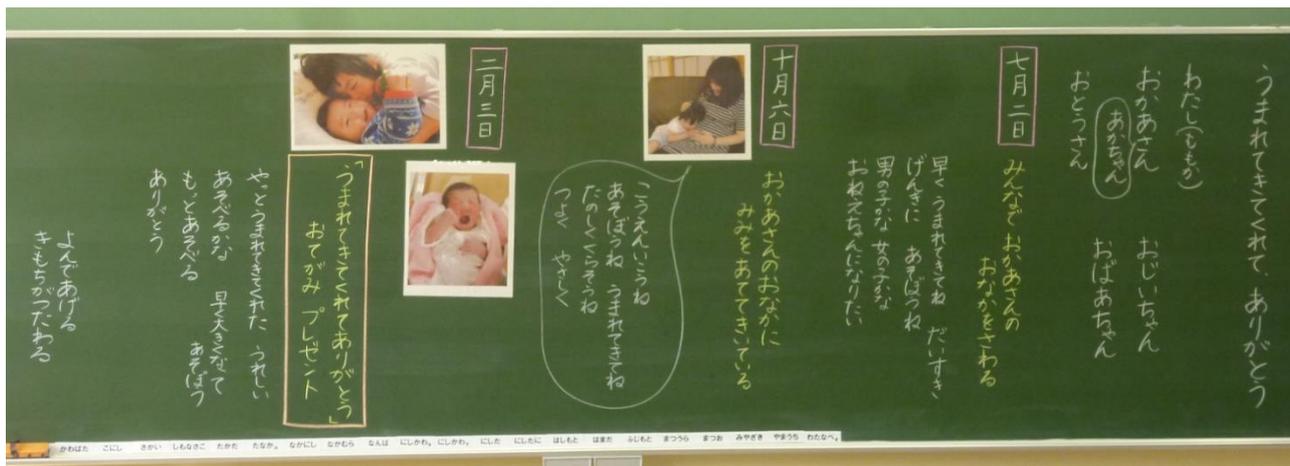


図6 「うまれてきてくれて、ありがとう」の学習後の板書

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの教育方法（授業）の在り方を考える

主体的・対話的で深い学びで、問いを発見・解決できる子どもを育成していくには、子どもが事象とかかわり、他者とかかわり、互いの考えを比較し、思考して問い続け、振り返って次へつなげる学習を続けていく中で、自身が自己の高まりとして手応えを感じていく必要がある。

(1)の「主題名 命の誕生」の授業から、「主体的・対話的で深い学び」の教育方法（授業）の視点として以下のことがあげられる。

- ① 自分の存在を認める活動(自分のいいところ見つけ)、友だちから自分のよさを認めってもらう活動(友だちのいいところ見つけ)を大切にしながら、本時の学習の見通しを持つ。
- ② 問題解決に必要な視点をもって情報（問題に関係する作品なども含む）を収集し事前に学んだり、インタビュー活動や体験活動（動作化などを含む）を取り入れて学習を進める。
- ③ ペア活動やグループ活動では、互いの考えの根拠を大切に比較・検討したり、他の人の意見を取り入れたりしながら学習を進める。その際、必要に応じて思考ツールなどを活用することで、互いの考えを可視化（板書等の活用も含む）し、分類したり、関連付けたり、統合したりして、考えがどのようにつながり、変容していったのか子ども自身が捉えることができるようにする。
- ④ 学びを振り返る場面では、個人で書く活動を継続して取り入れる。その際、自分の

活動だけでなく、「なるほど」と思った友達の考えのよさや疑問、困ったこと、次への意欲など、個人の学びの様相に応じて振り返ることができるようにしていくことが必要である。学びを振り返り、積み重ねていくことで、自分の考えがどのように変容していったか、どのように深まったか、子ども自身が自覚できることとなる。

4 新しい教育方法の展開について

これからの新しい時代に求められる資質・能力を育成するためには、まず学校は、地域社会の様々な機関等とも連携をしながら、子どもたちの態度・意欲や志向性などといった情意的な領域に関する能力を高めていく必要がある。また、指導者は、子どもたちが学習で、何をどのように学び、学んだことで何ができるようになったか等々育成すべき資質・能力とは何かを明確にしなが、より具体的な学習を進めていく必要がある。

新しい教育方法では、従来から言われてきた基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、これらを活用して課題発見・解決そして創造していくために必要な思考力・判断力・創造力等の能力育成を重視していく必要がある。

以下は、筆者が考える「主体的・対話的な深い学び」を進める深い学びのプロセスとしての教育方法の一例である。

<深い学びを進める学習プロセス> (例)

—導入の段階—

子どもたちの意欲や関心がわく学習の課題を明示する。

- ・思考する必然性（深める価値や余地のある）のある課題設定が必要。
 - *興味づけ、動機づけを工夫しての問題意識の鮮明化が必要。（はっとする なぜとを感じる、追究したいと感じる工夫等）
 - *絵や写真を見せる *実物を見せる *とっておきの話しをする *フラッシュカードを使う 等々
- ・双方向のやりとりを・相互に作用し合うことを重視する。

—展開の段階—

学習目標にそって、個人学習→・ペア学習・グループ学習→全体学習を行う。（探求活動や表現活動を喚起、学習目標の達成に向けて学習活動を方向づけて組織していく。）

- ・個人学習（ワークシートに書き込む等）やグループ学習で話し合う時間が確保されるとともに時間制限も明示する。（問題の配列が、個人学習→グループ活動への移行を促すように）
 - *既知・既習と未知・未習との間を問い、意外性や矛盾と出合わせる。
 - *対立点や矛盾をより鮮明にし、多様な感じ方、考え方を引き出すように問いかける。
 - *チームで協力する。チームに貢献することを大切にする。
 - *自分の意見を表明する。→他者の意見を傾聴する。→自分の考えを修正する。→もう一度自分の考えを表明するといった過程あること。その中で「折り合いをつける。」「修正する。」といった場面が含まれていること。
 - *活動を通して得られた知識やスキルが個々の学習者自身のものになっているか

を相互に評価し合う。

—まとめと評価の段階—

振り返りを行い、子ども一人一人が学びを認識する。

- ・リフレクションカード（確認事項も含む）などに記入し、個人個人が振り返る。
- *学習プロセス（個人学習、グループ学習、全体学習）の中で、子ども一人一人の考えが、自分や他者に見えるように可視化していくことが求められる。
(子どもが自分自身の思考の変化を認識でき、その成長を確かめることができる)。

以上、例を示したが、単に問題解決的なプロセスだけで学習を流すだけの活動主義では、考える力はつかない。深い学びを担うためには、教師の言語的コミュニケーション力（励みを持たせる発問、指示、評価等）、非言語的コミュニケーション力などの教育技術とその工夫が特に求められる。

おわりに

今日では、獲得される「知識のストック」よりも様々な知識を獲得し、それを生かして活用して行こうとする学習能力こそが、未来社会を生きていく上で重要となる「知識基盤社会」が本格的に到来している。そのような「知識基盤社会」の中では、子どもたち一人一人が学びの中で、主体的に自らの可能性を最大限に発揮し、深く思考・追究していくとともに、よりよい社会の実現と自らの人生を自らの手で創り出していくことの方向性を探っていくことが極めて重要となってくるのである。

このような深い学びを追究していくには、学校における教育課程は学校内だけに留まらず「社会に開かれた教育課程」を編成し、子どもたちが身近な地域社会や世界の様々な地域とも接点を持ち、自らの力で学びを深め追究していくことができるしくみを整えていくことが必要である。

そのためには、教育内容そのものも子どもたちの目からも、保護者からも地域からも見えるもの（可視化される）になっていくことが大切であり、学校や地域社会の双方向からの働きかけの中で、子どもたちの汎用的能力を育てていく必要があると考える。

それには、教員そのものも質的転換が求められているのである。国際教員指導環境調査(TALIS2013)によると、日本の教員は、他国の教員と比べ、授業改善のために学ぼうとする姿勢がうかがえる。しかし、そこにはまだ「教えるために学ぶ」教員像しか見えてこない。これからは、これまでの「教えるために学ぶ」教員ではなく、「学ぶために学ぶ」教員、つまり「学びの専門家」への転換が求められるのである。

今回、「社会に開かれた教育課程」の理念と方向等については論述できたが、具体的にその教育課程をどう展開すべきかについての分析は十分とはいえない。今後、「教育評価」の在り方と絡めながらさらに研究を深めていきたいと考えている。

<参考・引用文献>

- ・国立教育政策研究所「教育課程編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」p. 14-15
- ・文部科学省 小学校学習指導要領(平成 29 年 3 月 31 日告示)
- ・前川喜平文部科学省初等中等教育局長「これからの教育改革はどうなるか」『教職研修』2014 年 4 月号教育開発研究所
- ・林尚示「カリキュラムの類型」、天野正輝(編著)(1999)、『教育課程重要用語 300 の基礎知識』明示図書 22 頁
- ・田村知子『カリキュラム・マネジメント-学力向上へのアクションプラン-』日本標準 2014 p. 12
- ・中留武昭・曾我悦子『カリキュラムマネジメントの新たな挑戦』教育開発研究所 2015 p. 18
- ・斎藤剛史「教育誌 5 月号アクティブ・ラーニングと次期改訂」『内外教育』2015 年 5 月 19 日号
- ・「学士課程教育の構築について(学士力)」答申「用語解説」55 頁
- ・高階玲治「次期教育課程とアクティブ・ラーニング」『月刊プリンシパル』2015. 5 月号 p. 22 p. 23
- ・松下佳代(2015)「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」京都大学高等教育研究開発推進センター編『ディープ・アクティブラーニングー大学授業を深化させるためにー』勁草書房 1-27